

# 華北農村調査の記録

## —2017年8月河北省農村—

河野 正

### I 調査概況

本報告は2017年8月に中国河北省廊坊市および唐山市の農村で行った聞き取り調査の記録である。筆者による河北省唐山市における調査は4度目であり、玉田県ではこれまでも複数回調査を行っている<sup>[1]</sup>。

今年度の調査は、昨今の日中関係に鑑み、極力簡潔な調査を試みた。即ち調査地を絞り、聞き取り対象も各地1組ずつとし、計2日間で調査を終了することとした。本来ならば昨年度のようにさらに多くの地域で多くの人から聞き取りを行うべきであったが、今年度の聞き取り先が少ないのはこのような理由による。同様の理由により、昨年度まで明記していた中国側の協力先については、本年度の調査報告には明記しない。

調査対象とする地域のうち唐山市は、河北省の中で「冀東」と呼ばれる地域であり、河北省の中でも東北に近く、古くから多くの農民が、旧満洲を始めとする各地に出稼ぎに行っていた。『中国農村慣行調査』の対象村である昌黎県侯家営もこの地域に属しており、旧来の村落の状況もある程度明らかになっている<sup>[2]</sup>。

廊坊市は河北省内で特徴的な形をしていることで有名である。これは瓢箪のような形をしているが、その北部分と南部分はほとんど接していない。それは北部分が直轄市である北京市と天津市に挟まれた飛び地のようになっているためである。今回の調査先である香河县はこの飛び地部分に属しており、そのため北京・天津両都市圏の近くに位置している。このような地域の特徴は村の副業などにも顕著な影響を与えていた。香河县は現在のところ鉄道が通っていないため、鉄道による北京・天津への移動は不便だが、両都市圏との関係は現在でも強く、今回も聞き取りの後、自家用車で北京市の地下鉄駅まで移動して宿泊先へ戻ることができた。

本報告ではプライバシー保護のため、人名・地名はアルファベット表記としてある。地名

は県までは実名を表記し、村名をアルファベットにしてある。例えば「十里店村」であれば「S村」、人名は例えば「毛沢東」なら「MZD」と表記する。

## II 聞き取り内容

### 1 河北省廊坊市香河县 Q 郷 J 村

#### (1) WH

2017年8月15日 午後  
インフォーマント年齢：72歳 戊年

#### エゴについて

- 本村生まれ。初級小学校まで通う。
- 卒業後、農業を行う。これは人民公社の頃。
- エゴは8人兄弟の3番目。兄と姉が1人ずつおり、弟が3人、妹が2人いる。一番下はエゴと20歳ほど離れている。
- 土地改革の時に労働力が父一人しかいなかったため、貧農に分類された。
- 1965年から6年間兵士になった。野戦部隊に参加した。
- 1971年に戻ってきた後、生産小隊隊長を3年間担当した。その後、生産大隊の党支部委員になった。
- 軍隊に行ったのはとても光栄なことである。ベトナム戦争にも参加した。しかしベトナム戦争にともなう拡軍で徴兵された訳ではなく、志願した後にベトナムへ送られることになった。当時、本村から戦争に行った人は、エゴ以外に5人いた。
- 妻の名前はHRL。1969年に結婚した。
- HRLは本村人。だがエゴは村の西側育ち、HRLは村の東側育ちで、もともとは知り合いでなかった。
- 村で劇をやっている人が紹介してくれて結婚した。本村では同じ村人同士の結婚が多い。村が大きいため。
- HRLは生産小隊の会計や出納をやっていた。生産大隊では針仕事もした。

#### 土地改革について

- 本村の「解放」は北京・天津と同じ頃（ということは1948年末から1949年初の時期である）。

- 土地改革の時、村の地主・富農は5～6戸しかいなかった。J姓2戸、L姓3戸。
- 村の70%前後が貧農だった。
- 当時の主要な作物は小麦、トウモロコシ、高粱、綿花など。特に小麦・トウモロコシが多かった。

### 農業集団化について

- 本村で互助組が組織されたのは1952～1953年。1年程度しか存在しなかった。
- 本村で初級農業生産合作社（以下初級社）が組織されたのは1954～1955年。こちらも1年程度だけやって、すぐに次の形態になった。
- 本村で高級農業生産合作社（以下高級社）が組織されたのは1956～1957年。
- 初級社は一村一社規模。高級社と初級社では規模は変わらないが、高級社の方が共有化したものが多いなどの違いがあった。
- 互助組や合作社には、地主・富農も含めて大部分の農民が参加し、合作社に入らなかったものはごく少数である。また、それらの人も後から入社した。
- これらの人がすぐに入社しなかったのは、集団よりも個人経営の方が良いと考えていたため。しかしこのような考えは後から改められた。
- 一度入社した後、退社した人はいなかった。
- 本村で人民公社が組織されたのは1958年。
- 1958年時点で村には生産大隊1隊と生産小隊4隊があった。
- その後、小隊が7隊に再編成され、エゴは第7隊に参加して農業を行った。
- 生産小隊が分割・再編成されたのは、もともとの隊では隊当たりの人数が多すぎ、指導に不便だったため。
- 生産小隊の分割・再編成は住むところを基準に分けなおした。
- 同姓の人々がまとまって住んでいるため、住むところを基準に分けると隊内に同姓が多くなる。そのため概ね、同姓同士で生産小隊を組織することが多かった。
- 村の姓はW姓（エゴと同じもの）・J姓（村名に入っているもの）・H姓・L姓がそれぞれ40～50戸で同程度。Z姓やHN姓（H姓と区別するためにNを付したが、どの姓も漢字一文字の単姓である）も少なくない。
- エゴの生産小隊はW姓の人が多かったが、全員W姓だった訳ではなく、他姓もいた。
- 生産小隊の規模は1隊につき100人程度。当時の村全体の人口は1,800人程度。現在の人口はこれより少し多いくらい。
- 1983年に人民公社が解体し土地を分けた。当時は5人家族で、1人当たり1.5ム一分け

た。これにより食糧が増えたので生活が楽になった。分けられた土地に植えた作物は主に小麦・トウモロコシ。

- 人民公社には 21 の生産大隊があった。
- 社長は県から派遣されてきた人。彼らと各生産大隊との関係は悪くなかった。

### 村の副業について

- 本村には 1975 年以降、文房具のコンパスや精密機械用ドライバーなどを作成する副業があった。
- このような副業は、北京の会社の人々が村に来て始めた。理由は本村が北京から近いためである。
- この副業は村内 60~70 人の若い男女がやっていた。労働点数は農業と同じ。
- この副業は 2001~2002 年頃にやらなくなった。理由は会社がなくなったため。
- この他の副業として、1970 年頃に始まった、ボーリング工事の機具の部品作りもある。これらは生産大隊・生産小隊の両方がやる。
- 生産小隊の副業として、1963 年頃より箒づくりを行った。それ以前には個人の副業も含めて、村に副業はなかった。
- 本村はこのように多くの副業があったため、村の生活は良いものだった。
- 他の村でも絨毯や旋盤などを作る副業があったが、コンパスを作っていたのはここだけだった。
- 経済状況が良いため、公社内の他の生産大隊との関係も良かった。

### 村の廟

- エゴが小さいころ、村には「大廟」があった。1960 年代になくなった。生産隊が壊した。その後、再建されず、現在村には廟はない。
- 大廟では観音など、仏像が祭られていた。
- 大廟では毎年春節の時に廟会があった。大道芸や劇の上演などを行った。現在はない。
- 劇をやるのは全て村の人。劇をやる労働点数をもらうことができた。
- 公社の中で、他の村へ行って劇を上演することもあった。
- 劇をやるには、生産大隊が衣装や小道具を購入手、村人が自発的に組織して行く。皆が参加することができ、また参加したいと思っていた。参加したがるものはいなかった。
- 劇をやる際、生産大隊が道具などを購入してくれるため、費用はかからない。

- 1960年、文革のために劇をやらなくなった。この頃には「話をするにも注意が必要」だったため。その後現在に至るまで、集団での活動はなくなった。
- 現在の活動としては広場舞（近年中国で流行している、広場などで音楽を流して踊るもの）がある。これは集団での活動ではなく自発的なものだが、生産大隊が場所を提供している（その後、村内を散策した際、村政府前で「ここが広場舞の場所だ」と説明を受けた。村政府の敷地を開放しているようである）。
- 隣の鎮であるA鎮では現在も元宵節に廟会をやっている。A鎮には清代に下賜された、乾隆帝の文字が入ったのぼり（中帆）がある。
- A鎮の廟会は農業集団化時期も途絶えることなく行われていた。この時期には劇の内容が革命的なものに変わった。

## 2 河北省唐山市玉田県S鎮S村

### (1) ZHM

2017年8月16日 午前

インフォーマント年齢：64歳 巳年

### エゴについて

- 本村生まれ。高級中学校卒業。鎮の高級中学校に通い、1972年に卒業した。
- 文化大革命中だったため大学には行かれず、高級中学校卒業後は半年農業を行った。
- その後、人民公社で13年間、秘書助理を行った。主な仕事は手紙を書いたり文書を起草したりすることである。

### 村の人口

- 多い姓はW姓、L姓、LU姓（L姓と区別するためにUを付したが、どの姓も漢字一文字の単姓である）、Z姓（エゴの姓）の4つである。
- 1960年代当時の人口は1,700人余り。1992年には2,100人余りとなり、現在は2,541人。戸数は670戸だが建物は712軒ある。これは1戸で2軒の家を持っている人もいるため。

### 農業集団化について

- この地域の人民公社の社名は鎮名と同じ。12村（生産大隊12隊）から成り立っていた。
- 本村の生産小隊の数は初め6隊だったが、11隊を経て12隊まで増えた。
- 生産小隊が分割・再編成された理由は生産小隊が「団結」しなかったから。

- 分割・再編成の後、相対的に問題は少なくなった。その理由は「姓と姓の間の問題」は解決しにくい、「姓の中の問題」は解決しやすいためである。
- 12の生産小隊は地区ごとに分けた。姓ごとに分けた訳ではないが、概ね姓ごとにまとまって居住しているため、地区ごとに分けても大体姓ごとに分かれた。
- エゴが参加したのは第6小隊。この生産小隊はZ姓だけでなくW姓もいた。理由はW姓は人口が多いため。
- (具体的にどのような問題があったのか、という問いかけに対して) 当時は自留地の間に固定の境界がなく、それをめぐって問題が発生した。私有地は国の規定で一人当たり0.25ムーとされた。実際には一家族につき半ムーが分配された。ここでは自家消費分の野菜などを育てた。
- 集団労働で作った作物は労働点数で分配された。当時は小麦・トウモロコシ・綿花・サツマイモなどを植えた。小麦とトウモロコシは現在も主要な作物である。綿花は今はなく、サツマイモは今も少しある。
- 小麦の生産量は1960年代には1ムー当たり200斤余り。現在は同じ面積で1,200斤余りになった。当時は化学肥料を使わなかったのと、井戸もなく天水農法を採っていたため生産量が少なかった。
- 当初、集団で井戸を掘ることはなく、1969年になってやっと生産大隊の井戸を掘った。当時は電気もなく、1972年になって電気が来た。
- 旧来、それぞれの家に3~4mの深さの手掘り井戸があり、飲み水はそれを使っていた。しかし水が少なく、農業用水には使わなかった。
- 生産小隊には政治隊長、生産隊長、会計といった役職があった。政治隊長は書記のようなもので、会議を開く、思想指導を行う、などが仕事である。これは党小組長を兼ねており、必ず党員でなければならなかった。生産隊長・会計は党員でなくても良い。
- 生産大隊には書記、隊長、会計がいる。人民公社には書記、社長、秘書、武装部長などの役職があるが、これらは皆、上から派遣されてくる人々である。
- 毎月生産大隊長が集まって会議を行っていた。これは日帰りで行った。
- 小隊長は毎月2回会議を行っていた。

## 村の副業について

- 本村が所属する人民公社のうち、80%の村で副業がなかった。本村はそのうち20%に属し、副業をやっていた。人民公社の中で最初に副業を始めたのが本村である。
- 当初は製紙、サツマイモの粉条作りをやった。1978年に生産小隊で井戸を掘ったが、

その水を使ってこれらの副業をやった。

- そのためこれらは生産小隊の副業である。そのため小隊同士で格差が生じた。エゴの所属する第6小隊は全体の中で1~2位程度の良い状況にあった。そのためエゴの生活は比較的良いものだった。副業自体はどの小隊もやっていたが、規模に差があったため。また人の販売・生産の能力はそれぞれ異なるためでもある。とは言え小隊同士の矛盾は大きなものではなかった。
- 副業で生産したものは自由市場で売った。自由市場はもともとの集市である(本県には清代から現在に至るまで著名な集積地・市場がある)。
- この自由市場はずっと途切れることなく続いてきた。文革中にも途切れなかった。件の有名な市場があったため、当地には古くより周辺でものを作って市場で売る習慣があった。エゴたちが副業をしていたのもこの習慣によるものである。
- (では他の生産大隊が副業をしていなかったのはなぜか?という問いかけに対して)それは思想が「不開放」だったため。皆、商売をして損をすることを恐れていた。

#### 飢饉について

- 大躍進運動失敗後、「三年困難」時期には食べるものが足りないので野草、トウモロコシの芯、落花生の殻などを食べた。エゴの姉は19歳の時に飢餓で死んだ。
- 1976年も食べ物が足りなかった。生存できるギリギリの量しかなかった。
- 本村は土地が少なく人が多いため飢饉が辛かった。1978年頃から良くなってきた。

#### 宗族について

- W姓の祠堂が15里離れたW村にある。ここへは周辺のW姓の人々が毎年清明節に集まってくる。当地のW姓は河南省から来たW姓の末裔を自称している。
- 他の姓は特に祠堂はない。
- 同姓での活動は特にないが、結婚式・葬式などの時には手伝う。関係が良ければ他姓の人の手伝いをすることもあるが、このようなことはあまり多くはない。

#### 寺廟について

- 1950年代、本村には2つの寺廟があった。東大廟と西大廟。何を祭っていたかは分からない。東大廟はその後エゴの通った小学校になり、西大廟は取り壊して生産小隊の本部になった。これらの廟に廟会があったかは分からない。
- 20里離れたM村というところにはJ寺という寺があり、ここでは現在も廟会がある。

エゴは20歳くらいの時に廟会に行った。ここは文革中も途切れることなく廟会をやっていた。

- J寺では「寺で金を使わないと道に迷う」という迷信があり、廟会では食べ物を買うなどにお金を使った。
- J寺の廟会は劇はなく、食べ物の屋台や物売り、子供が遊ぶところなどがあった。
- J寺の廟会の際、本村で誰から金を出すということはない。以前のことは分からないが、現在の廟会は政府が文化保護のために資金を出していると聞いた。

## おわりに—考察に代えて—

調査概況でも述べたように、本年度は現在の日中関係のために2組しか聞き取りを行うことができなかった。とは言え、これまで複数回調査を行っている唐山市玉田県と、北京・天津という大都市圏に近い廊坊市香河县という、それぞれ特徴的な地域で調査を行うことができた。

特に副業について考えるならば、これまで筆者が調査を行ってきた地域の中で、J村は極めて特徴的な副業を行っていた。ドライバーやコンパス、工業機器の作成というのは大都市近くならではの副業であり、そのため村の経済状況も比較的良いものとなっていた。本村は受け入れ側の対応も好意的であり、また特徴的な点多かったため、次年度以降改めて聞き取りを行いたい。

玉田県S村については、聞き取りにおいて若干の疑問をおぼえた。それは副業にまつわる自由市場の存在と廟会が、文革中も途切れず続いていたという点である。例えば自由市場については、1950年代の統購統銷（統一買い付け・統一販売）の完成以降、自由市場の廃止と復活が繰り返されてきた<sup>[3]</sup>。また廟会についても、多くの地域で文革中に寺廟の破壊が行われ、廟会などもそこで一旦途絶えている<sup>[4]</sup>。そのため当該地域で仮に本当に自由市場・廟会が文革中も含めて途切れることなく続いていたのであれば、それは非常に特徴的と言える。他方、インフォーマントの記憶違いや誇張を含んでいる可能性も大きく、慎重な史料批判が求められるだろう。

両村に共通して見られた興味深い特徴に、宗族に関するものがある。両村はどちらも雑姓村であり、特定の宗族が強い力を持っている訳ではない。しかしながら今回の聞き取りでは人民公社時期の生産小隊の編成をめぐる宗族が問題となった様子が見られた。またここで発生した対立の発端は個人の自留地を巡る争いであり、本来宗族とは大きな関係はないものである。これは普段目立った対立・団結が見られない宗族という概念が、何か問題が発

生した時に団結の単位や対立の単位になっていると思われる。

一般的に、南方に比して宗族のつながりが弱いと言われる華北であるが、このように何か問題が発生すると宗族として団結している事例は興味深く、今後の聞き取りの中でも考えていきたい。河北省内には今後も聞き取り可能と思われる地域は多数ある。今後、様々な状況が好転することを祈りつつ、次年度以降も更なる聞き取り調査を行い、新たな知見を得ることを目指したい。

#### 注

- [1] 拙稿「華北農村調査の記録—2014年9月、2015年8月河北省農村—」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第2号、2016年、180-197頁、「華北農村調査の記録—2016年8月河北省・山東省農村—」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第3号、2017年、233-251頁など参照。
- [2] 中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』第5巻、岩波書店、1957年参照。
- [3] 例えば統購統銷完成後、1956年秋頃には全国各地で市場管理が緩められ自由市場が増えるが、10月には市場管理の緩和に行きすぎが生じ、統購統銷の妨げになっていると批判がされている。周恩来「國務院關於放寬農村市場管理問題的指示」（1956年10月24日）『中華人民共和國國務院公報』1956年第36期。
- [4] 例えば注1、2016年度聞き取り参照。

（この ただし 学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員）